

ルカの福音書 第18章 13節

「ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』」

取税人が祈る直前にパリサイ人の堂々とした祈りがある。それに比して、ところが、である。とても祈れるような者ではありません、と遠く離れ立ちます。天に顔向け出来るような者ではありません、と目を伏せます。天を見上げることができません。そればかりか、自分の胸をたたきます。まるで心をかきむしる思いでことばを放ちます。地をはうようなことばとなります。

頭のとっぺんから、足のつま先まで汚れた者です、と告白します。自分の胸のうちにあるところの罪深さをたたきながらことばを放ちます。そして、呼ぶのです。「神さま。」地べたをはうような祈りを聞いてくださるでしょうか。うつむき、自分をたたく者の叫び、祈りが届くでしょうか。御名を呼んでみたものの、呼ぶ者の罪深さがさらに露わになるばかりです。

だから祈るしかありません。罪人の私をあわれんでください。祈るしかありません。届くか、聞いていただけるか、考えることもなく、祈ります。主イエスは言われる、「あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。」地をはう罪人の祈りは聞かれました。聞いておられる神さまです。

2023年10月11日